

黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.84 (September 30, 2017)

第84号 2017年9月30日

例会発表要旨

4月例会 2017年4月22日 龍谷大学深草キャンパス

① ルーツを複数化するー公共人類学的視点からの楽曲・映像制作の記録

神本 秀爾(久留米大)

本発表の目的は、2016年度後期に所属機関において、ミュージシャン Sing J Roy と学生が協同して取り組んだ、楽曲「チクゴノワ」とミュージックビデオの制作を通じた地域表象づくりの背景と過程を報告することである。

近年の大学にとって地域連携は責務であるが、地域連携の場で用いられる文化概念や地域概念と、文化人類学のそれとの間にはギャップがあることが、文化人類学者が地域連携に対して消極的な態度を示す一因となってきたことが指摘されてきている。発表者個人の立場からは、それらの概念は、地域の文化が変化し人々の多様性が増し続けている現実と比べて、寛容性が不十分である場合が多いように映っている。そこで、本取り組みにおいては、異種混濁的なアイデンティティや文化のあり方に対する見方を鍛えてきた、ディアスポラ研究の文化概念を地域連携の場に織り込むことで、文化人類学的な知を公共の領域に開き、学生に対しては、そのような認識を念頭に置きながら地域の文化をとらえ、作品を制作していくアクティブ・ラーニングの機会となることを心がけた。

「チクゴノワ」では具体的に、起源と経路という2つのルーツ(roots / routes)の複合的に関わる場として筑後地方・久留米市をとらえ、従来の地域表象にとらわれることなく、現地における人やモノの異種混濁性を捨象せず、「いま」の筑後像・久留米像として肯定的に表現することを試みた。とはいえ、本作品の制作意図や、制作過程に込められた知が果たしてどれほどの公共性やインパクトをそなえていたのか測定することは困難である。ただ、福岡県内のメディアにおいて、新たな地域表象をつくらうとする、学生による地域への積極的な関わりの記録として肯定的に紹介されたことで、一定の目標は達成できたと評価して良いだろう。

② 黒人詩の見方についての試論—ラングストン・ヒューズを起点として

古賀 哲男(大阪市大)

「1. はじめに—黒人詩史論は可能か」ではこのような無謀とも思える総論的議論の可能性をまずはいくつかの黒人詩アンソロジーを紹介することから探った。最も近年の試み(Charles Henry Rowell, ed. *Angles of Ascent: A Norton Anthology of Contemporary African American Poetry*. New York: Norton, 2013)が主として1960年代のブラックアーツ運動に対する近年の黒人詩人たちの反応を何うには有益なものとなっていること、Langston Hughes 研究の権威である Arnold Rampersad によるもの(*The Oxford Anthology of African-American Poetry*. New York: Oxford UP, 2006)や Michael S. Harper によるもの(*The Vintage Book of African American Poetry*. New York: Vintage, 2000)、その他(Joanne V. Gabbin, ed. *Furious Flower: African American Poetry from the Black Arts Movement to the Present*. Charlottesville: U of Virginia P, 2004)のアンソロジーに言及したうえで最終的に Stephen Henderson による詩史論(*Understanding the New Black Poetry: Black Speech and Black Music as Poetic References*. New York: William Morrow, 1973)の歴史的重要性を指摘した。

「2. Stephen Henderson の「見方」その1—「解放」(liberation)という理念」においてはヘンダーソンの主張する黒人詩のテーマとしての「解放」の理念が黒人詩を黒人詩たらしめるにふさわしいテーマとなり得ている様を上述のヘンダーソンの詩史論を辿ることによって、奴隷解放運動からの歴史的責務が人種的テーマとしてブラックアーツ運動まで継続している様を確認した。

「3. Henderson の「見方」その2—大衆に呼びかける詩のスタイル(Hughes と Lee の詩)」においてはヘンダーソンが指摘する黒人詩のスタイル的特質を具体的に Hughes “Laughs” (1922)と Don L. Lee (Haki R. Madhubuti) “Don’t Cry, Scream” (1969)の詩において両者がともに大衆に呼びかけるスタンスを取っていることに着目して比較検討した。

「4. 批評的視座—Houston Baker の立場」においてはヘンダーソンの主張の今日的意義を Houston A. Baker の批評において探ることで、主にブラックアーツ運動の遺産が今日の黒人研究に果たしている点を確認することにより、このような黒人詩の「見方」が孕む問題にも言及したつもりである。

③ トニ・モリスンとスレイド・モリスンの *Who’s Got Game* シリーズとイソップ物語

小泉 泉(フェリス女学院大)

トニ・モリスンがこれまで発表してきた作品において、彼女の視線は、常に「弱者」としての子どもに向けられてきたように思われる。モリスンは、1999 年から、息子スレイドとともに、いわば「子ども向け」とされる絵本を出版し、2003 年に出版された *Who’s Got Game* シリーズ(“The Ant or the Grasshopper,” “The Lion or the Mouse,” and “Poppy or the Snake”)は、イソップ物語の書き替え(語り直し)として知られる作品である。本発表では、まず、モリスンが、1993 年のノーベル賞受賞記念講演で述べた物語と、その中で述べられた「死んだ言語」(a death language)について言及することから始め、これらの絵本が、伝統的な「子ども向け」作品の規範とイデオロギーに反している点について述べ、モリスンの狙いが、子どもの目線か

ら、その想像力豊かな世界に、さらに深く踏み込むことであったと言える点について示した。さらに、イソップ(あるいはイソップ物語)の起源をたどり、その奴隷文化における背景と、イソップ物語が元来包含してきた政治的概念において、モリスンのイソップ物語の使用の意義を見出し、同時に、*Tar Baby*や*A Mercy*のようなこれまで書かれてきた作品と共通するテーマが、*Who's Got Game*シリーズにおいても示されている点に言及した。最後に、シリーズ3冊について、それぞれの作品のテーマと解釈を、パスカル・ルメートルの絵が物語に及ぼす効果とともに示した。これらのことを通して、*Who's Got Game*シリーズにおいて、モリスンは、ある意味において、「死んだ言語」を蘇らせることを可能にしているとして、結論づけた。



(モリスンの絵本 *Who's Got Game* のスライドを用いて例会発表する小泉氏)

会員からの投稿

アメリカ大学院留学報告：人種政治の研究と日常のはざま

阿津坂祐貴(ライス大学・院)

この度は機会をいただきまして、留学の報告をさせていただきます。昨年 8 月から、アメリカのテキサス州ヒューストンにあるライス大学に在籍しています。政治学部(Department of Political Science)の博士プログラムになります。アメリカの南部に訪れることも、海外で生活することも初めてでしたので、毎日が新しい常識との遭遇で、常に期待と不安の入り混じった気持ちを胸に、日々をすごしております。

今回アメリカではじめに向かったのが、インディアナ州のブルーミントンでした。そこで奨学金団体のオリエンテーションを受け、世界各国の留学生との交流をまじえて、アメリカ生活の準備を行いました。すぐに気づいたことは、私自身がある意味でとても人種化していたということでした。もちろん、中南米やヨーロッパ、アフリカからの人々とも積極的に話をしてはいましたが、それ以上に一緒にいても無理なくすごせたのが、タイ、ベトナム、インドネシア、韓国、中国など東(南)アジア出身の留学生でした。それはほかの参加者にも同じようで、少なくとも夜のパーティなどでは、同じような地域の人々でグループを作っていました。初日はジャパンだったものが、最終日にはエイジアに変わっていく様子を、不思議な気持ちでみていたことをよく覚えています。

ヒューストンについては、さっそく大学に手続きにむかいました。その日はよく晴れた夏日で、芝生の緑と空の青さが、初めて訪れるキャンパスをとて鮮やかにしていました。後にライスは総合大学としては中規模なため、キャンパスも中くらいのサイズだと聞くことにはなるのですが、その時はフットボールのスタジアムやパーキングの大きさに圧倒され、ついにアメリカの大学に来たのだとナイーブにも感じておりました。グーグル・ストリートビューでの予習の努力もむなしく、迷い。炎天下の中さまようことになったのですが、その途中よくみかけたのが野生の栗鼠でした。今ではもはや見向きもしないのですが、キャンパス中で栗鼠が走り回っており、秋にはどんぐりを割って、ほおぼるというシーンがみられます。また一度だけ、子供サイズの鼻を樹洞(木の穴)からみかけたことがあります。大学とフットボールチームのマスコットが鼻で、また昔からなぜか鼻好きだった私は、初めての野生の鼻にとて感激いたしました。

さて、一般的にはそれからすぐ授業、となるわけですが、そこからまた 2 週間準備をする時間があり、大学院生が教えるマス・プレップ(math prep)と呼ばれるものに参加をしました。これは、高校レベルの微積分や線形代数、確率論などを復習し、統計学など数学を用いる方法論(必修科目)を学ぶときに、きちんとついていけるようにさせるというプログラムです。計量的な手法のバックグラウンドがない私としては、基礎を固めることのできる大変ありがたい機会でした。

その後はついにコースワークがはじまり、今にいたります。プログラムでのコースワークは 3 年で、3 年目の終わりに 3 科目(専門、専攻、副専攻)の筆記試験を受け、博士候補生になることができます。それから博士論文の事前審査を受け、合格すると研究を進め、論文を提出することができます。基本的には 5 年のプログラムではありますが、それより 1-2 年長く在籍する人もいます。ただ、学部や外部からファンディングをもらえないとオフィスがもらえないこと

や、クビになるケースもあるため(留学生にとっては、帰国を意味します)、一定の緊張感の中、研究と勉強をすることになります。各セメスターでは、だいたい 3-4 つのコースを受講し、筆記試験(12~24 時間くらい)、タームペーパー、プレゼン(約 10 分)などの課題にとりくみます。また一年目の締めには、初年度の院生によるポスター発表のイベントが行われます。これは、方法論の講義でとりくんだ研究をポスターにまとめ、これを学部の教授にみてもらい、最優秀ポスター賞が賞金とともに贈られるというイベントです。

ちなみに、私のポスターは人種政治の研究でしばしば用いられる統計の手法についてのものでした。ecological inference とよばれるその手法は、あるマイクロレベルの現象についてわからない情報を、マクロレベルのデータのみを用いて推論するというものです。最も有名な例は、人種グループごとの投票率を推測するものです。人種グループごとの投票率や投票行動は、政治における不平等の度合を調べたり、より公正な選挙区を作りだしたりするのに、大変重要な情報になります。しかし、多くの場合、ある人種グループが全体としてどれだけ投票したのかや、どの候補に投票したのかについてのデータは手に入らないか、妥当性にかけるといわれています。そこで ecological inference では、代わりに(a)その地域全体の投票率と(b)その地域全体をしめるある人種グループ(e.g. 黒人)の割合という 2 つのデータを用いて、人種グループごとの投票率を推定します。私のポスターはここで用いられる各人種グループの割合を、一般的に用いられる投票年齢人口(VAP: voting-age population)ではなく、市民投票年齢人口(CVAP: citizen voting-age population)で測る方が正確なのではないかということの研究したものでした。これは、ヒスパニックとアジア系の場合、住民全体にしめる市民の割合が平均して 6-7 割なため、従来の方法では投票したかもしれない人口の割合を過剰に見積もっていると考えられるからです。ともあれ、ポスター報告が終わるころには、同期の院生たちもうちとけてき、競争しつつもお互いに支えあってゆくという環境が少しずつできあがってきたように感じております。

私を含めて同期は 11 人おり、そのうち 9 人はアメリカ人です。そのうち 3 人がヒスパニックで、6 名が白人です。一般的に一学年は、5 人ほどが相場ですので、大所帯です。学部全体(30 人ほど)では、アメリカ人と留学生の割合はちょうど半分ずつくらいで、留学生の出身地域は中南米が多いような印象があります。なので、パーティなどの際は、スペイン語のコミュニティが自然発生することが多いです。ちなみに、アジア人は 4 人のみで、コンピューター・サイエンスなどの学部に比べると割合は少ないです。また(東)アジア人といいますと、大学全体では、日本人はだいたい 10 名なのに対して、韓国人はおよそ 100 人で、中国人が約 800 人という分布になっているそうです。

また、ヒューストンでは、ヒスパニックでない白人と黒人がそれぞれおよそ 25%を、ヒスパニック人口が約 45%、アジア系が 6%ほどを占めているようです。圧倒的にヒスパニック人口が多いため、交通機関をはじめ、多くのサービスの放送と表示には英語とスペイン語が用いられています。また、私の通う大学にはテキサス・メディカルセンターと呼ばれる医療機関の集まる地域が隣接しているのですが、そこに勤務する医療関係者を見ると、とても人種の多様性を感じます。さて、人種的マイノリティ人口の増加は、政治にも影響を及ぼしますが、私の興味のある分野でいいますと、選挙区の改正が挙げられます。日本でも一票の格差が話題になっていますが、アメリカでは一票の重みを調整し、また人種間の不平等を是正したりするため、かならず 10 年ごとに国勢調査の結果にもとづき、(連邦議会下院の議席再配分と)地区改正が行われます。そして、1982 年の投票権法修正条項以降、選挙区の線を都合よく引いて、特定の人種グループの投票力を薄めること(vote dilution)が、投票権法に違反

するものとして規定されました。その後、新しく作られた選挙区が、マイノリティに不利な条件を生み出していると、多くの訴訟が起こされるようになったのですが、その際に地方裁判所が人種差別の証拠として求めているものの一つに、人種によって分極化した投票行動 (racially polarized voting) の存在があります。この意味するところは、もし投票行動が人種によって規定されているならば (つまり、多くの白人は白人に、黒人は黒人に、ヒスパニックはヒスパニックにしか投票しないのであれば)、ある人種グループの住民を細分化するような線引きは、違法であるということです。そのため、人種グループごとの投票行動を正確に把握することは、学問的にも実務的にも重要なテーマとされています。この分野は特定の地域についての深い見識と、洗練された統計分析やシミュレーション技術、また法律にかんする解釈が求められ、非常に興味深い分野だと感じております。近年のテキサスはこうした地区改正をめぐる訴訟の中心ともいえる州だといわれおり、私の所属する政治学部にも、テキサスの地区改正に関わっている教授が2人います。

さて、授業以外で何をしているのかといいますと、私のいるプログラムでは院生は毎学期、研究か教育のアシスタントとして、一人の教授に割り当てられ、その人のもとで補佐の仕事をすることが決められています。アシスタントを通じて研究や授業の仕方を学び、また運がよければ、教授と共著をする機会につながられることがあります。政治学の分野では、共同で論文を発表することが一般的になっていますので、分野の第一線で活躍している教授と一緒にプロジェクトをする機会があるというのは、院生を含め若手研究者にとって大変貴重です。現在私は、アメリカ地方政治や、マイノリティと女性の政治代表などを専門にする教授のもとに割り当てられており、彼女のチームとともに研究を進めています。昨年度は院生三人、ポスドク二人、学部生二人の研究チームに参加しました。具体的には、インターネットなどからのデータの収集、プログラミングなどを使ったデータの加工、データの分析、また仮説の構築などを行っております。この4月には、チーム全員でシカゴでの学会に参加し、合計三つの論文を分担して報告することができました。中でも私がかかわっている論文では、ルイジアナ州の市長選挙を分析し、どのような地方自治体で、黒人の候補がより選挙に出馬し、また当選しやすいのかということの研究しております。

終わりになりますが、ヒューストンに来てよかったと思うことのひとつに、アメリカの人種政治を研究という面だけでなく、より日常的なレベルで目の当たりにし、それがどのようなものなのかを学ぶことができるということがあります。例えば、昨年度ある教授とコーヒーを買いにいきながら研究の話をしていたのですが、彼がブラック・ピープルやヒスパニック・ヴォーターという言葉を使うたびに声を潜めていることに気付いたとき、ナイーブにも衝撃を受けました。話の内容は投票行動と統計についてだったのですが、何はともあれ外で人種について言及することはとてもはばかれることなのだとなりました。こうした現地での常識は、人種について言及することの多いヒップホップ文化や、スタンダップ・コメディなどにふれて日本で育った人間としては、ある種の逆カルチャー・ショックでした。本来ラップ音楽やコミックスが人々の関心を刺激するのは、それらが日常のタブーを積極的に取り上げるからなのですが、そのことに気付いたのは、こうした日常の感覚にふれるようになってからでした。

まだまだ分からないことだらけではありますが、ヒューストンでの生活は人種政治の研究と日常を行き来する貴重な機会となっております。これからはじまる二年目では、より深いレベルでアメリカの人種政治について体験をしていきたいと思っております。以上をもちまして、報告とさせていただきます。

入 会 者

長尾 麻由季(ながお まゆき)氏

所属:大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程2年

自己紹介:この度、黒人研究学会に新しく入会いたしました長尾麻由季と申します。専門はアメリカ文学・文化で、特にポストモダンのアフリカ系アメリカ人女性作家に興味を持って研究しております。現在、Toni Morrison と教育というテーマで修士論文を執筆中です。Toni Morrison に精通しておられる先生方が多くご在籍の御学会に入会できたことを大変喜ばしく思っております。まだまだ未熟者ではございますが、皆様から色々ご教授いただけましたら幸甚に存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

古東 佐知子(ことう さちこ)氏

所属:岐阜市立女子短期大学(専任講師)

自己紹介: Claude McKay や Richard Wright を中心に研究を続け、昨年両作家のディアスポラ性というテーマで大阪大学の博士論文を完成しました。ポストコロナル理論からも影響を受け、様々な場所から黒人研究者達が集っていた New York University の Africana Studies で研究した折には、黒人本質主義にならずに黒人文化を表象することの難しさを、考える機会になりました。また昨年と今年、黒人研究学会の全国大会の発表等を拝聴し、大変刺激を受けました。今後も会への参加を通じ知見を深めたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

氏名:浅香 育子(あさか いくこ)氏

所属:イリノイ大学歴史学部(助教授)

自己紹介:同志社大学アメリカ研究科の修士課程を経て、ウィスコンシン大学でジェンダー、人種、帝国、ダイアスポラ研究を専攻しました。博士論文を基にした著作 *Tropical Freedom: Climate, Settler Colonialism, and Black Exclusion in the Age of Emancipation* が Duke University Press から出版されます。Settler colonialism と black freedom との関係を考察しています。現在の興味は万延元年使節団を通じてみるアンテベラム期のアメリカ帝国主義、人種、ジェンダーです。会員の皆様から色々ご教授頂けますと幸甚に存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

氏名:佐々木 優(ささき ゆう)氏

所属:筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程3年

自己紹介:もともとスポーツ観戦を趣味にしていたのですが、卒業論文執筆時にふとしたことから Jackie Robinson のことを学び、アメリカ合衆国における人種とスポーツの抱える奥深い歴史について関心を持ち、研究を続けております。博士論文執筆にあたり、黒人研究学会のみなさまに様々なことを御教授頂けますと幸甚です。何卒よろしくお願いいたします。

(順不同)

編集後記にかえて

有り難いことにこの84号から編集担当をさせていただくことになった。私のような若輩者が担当して良いのだろうかと多少不安でもあったが、いろいろとサポートしていただきなんとかここまで辿り着いた。実際に編集作業をとおして各会員の発表や投稿を読ませていただいているわけだが、表現の一字一句、内容のつながりなどを見ながら「自分の修業がまだまだ足りない」と実感させられる。それと同時に非常に良い勉強の機会にもなっている。「発表要旨」を読みながら新たな知識を獲得し、また自分とは異なる視点に触れることができるのは実に楽しい。今回投稿していただいた「留学体験記」を読んだ際には、留学していた時の自分と重ね合わせ懐かしく思う一方、いつ寝ていたのかもわからない多忙な日々が鮮明によみがえってきて身の引き締まる思いであった。会員の方々も、この会報を読んで少なからず似たような感想を持たれるのではなかろうか。今後学会発表や留学されたときには、是非投稿をお願いしたい。

(猪熊 慶祐)

~~~~~

**<編集> 黒人研究学会・編集部**  
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

**<編集者> 猪熊 慶祐**

**ホーム・ページアドレス**  
<http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/>

~~~~~